

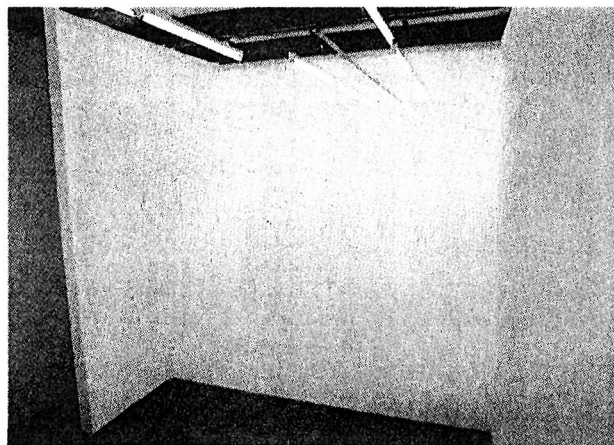
美術月評

8月

— 仲井真 憲児 —

興味深い「体感」意識

安谷屋美佐子展



安谷屋美佐子作品

もっとも興味深く思ったのは安谷屋美佐子展であった。絵画は、現世紀末の潮流の中で、芸術とは何かという定義

に自信を失い、今やどのような放恣()な解釈が可能かを求めるに至っている。美術する概念が、辞書的意味を離脱して独自のパスポートを準備したというべきか。安谷屋美佐子の仕事は、伝統的なアカデミズムの論拠()で逆えるか、という様式中心の思考からではなく、アカデミズムを固定し権威化するに必要な諸条件が見落とした部分に、芸術的何らかの要素はなかったか、という問いかけを行っているように思われる。

〔原材を、原材のままは使わない。〕〔再現出を意図しない。〕〔痕跡()を残さない。〕そのような徹底した工程の中で「自分の「見」の容量の空間をはかる」という。そのプロセスでいう「体感」という安谷屋の意識は、もの派(Thingness)対「Nothingness」を描く()がfor。